
エノコログサ

創成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エノコログサ

【Nコード】

N7808G

【作者名】

創成

【あらすじ】

「エノコログサって知ってる？」そんな一言で始まった恋。1年生に恋した優。優は今、高校3年生。4月、実柚に恋をした。3月、実柚に会えなくなる。

1・咲くといいな

もし、何年もたった時に、
君の隣に立っているのが僕だといいな。

そばに居てくれないか？

・・・いや、

そばに居させてくれないか？

君の事が好きだから。

なーんて、願いを込めて育てたよ。
願いが叶いますように。

2・出会いの前

「今日から3年か。なんか実感湧かねえなあ」
後ろから音無が話しかけてきた。

「そうだな」

適当に返すが、ばれたようで、

「何だよ、その適当な返事は」
と、音無にのしかかられた。

「いや、考え事してたんだよ。

俺、新入生歓迎のあいさつだし」
そう。

これは事実なのだ。

俺は選ばれてしまったんだ。

決める日に休んでたという理由で。

ざっけんなー！！

そんなんでやる気出るわきゃねえだろ！

・・・・・・ゴホン。

とにかく、選ばれたからにはきちんとやろう。

そうだ。俺は園芸部部长、速草^{はやくさ}優^{ゆう}。（関係ない）
成せばなる！

一通り考え、一度読んでみた。

大体の内容は毎年同じ。

伝統（？）とされている言葉を、
淡々と読むだけ。

んで、拍手が起きたら降りる。

時間があるから自己紹介。

名前はいいよな？

17歳の健全な男子高校生。

誕生日は1月8日。

早生まれ。

いいんだよ！

年変わってから1番初めに誕生日来るんだから。

んで、園芸部。

特に何かのコンクールとか目指す訳でもなく、

ただ植物を育てる。

俺については以上。

次は音無について。

音無は俺と幼馴染で、

腐れ縁で今も同じ高校にいる。

俺は「音無」^{おとなし}って呼ぶけど、

女子からは「準」^{じゅん}って呼ばれてる。

でも、決して女子から人気があるわけではない。

ちなみに花屋の息子。

「間もなく、入学式が始まります。

生徒の皆さんは、体育館へ集合してください」

放送がかかった。

うちの学校はチャイムじゃなくて放送なんだ。

「優、行くぞー？」

「ああ」

その時はまだ知らなかった。

後に、俺が園芸部に誘う、

「桶谷 実柚」^{おけや みゆ}の存在を。

3・真つ赤なお顔

「全員いるか？」

クラスの委員長が確認する。

「静かにしてください」

司会がマイクで言う。

「新入生が、入場します。

皆さん、あたたかい拍手をお願いします」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「新入生歓迎の言葉」

うわゝ来たよ。

「コツコツコツコツ・・・ペコッ」

舞台に来たのはいいけど・・・

こうやってみると全校生徒って多いな。

ヤバ！緊張してきた。

なんだっけ・・・

パニくっていたら音無と目が合った。

・・・・・・

あの野郎、笑いやがって！

緊張がとんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

よし、終わり。

あとは拍手を・・・・

しろよ拍手！

おいおい！んなとこで照れてんじゃねえよ。
誰かしろよな……

「パチパチパチパチ」

拍手が聞こえた。

みんな拍手の音がする方を見る。

一人の女子が拍手をしていた。

ただ……

顔を耳まで真っ赤にして。

「おもしれーやつ。そんなになるならしなきゃいいのに」

「ま、一応助けてもらったかな」

そんな事を考えていた。

席に戻ると、音無がにやけていた。

「お前緊張してただろ」

小声で言ってきた。

「してねえよ」

とりあえず言い返す。

何かお礼しなきゃな。

あの子に。

自惚れてるわけじゃないけど、
助けてもらったんだし。

でもどうやって探そうかな。

名前も分かんないし。

顔で探すのもな……

「新入生が、退場します」

そんな事を考えていると、
いつの間にか式が終わった。

とりあえず、今度会ったらお礼を言っておこう。

俺が彼女を園芸に誘うのは、もう少し先。

4・ 思わぬ収穫？

「キュツキュツ、ジャー」

何してるかって？

水を汲んでるんだ。

如雨露じょうろに。

これでも園芸部部长ですから。

「シャー」

水をかける。

植物に話しかけるほど暗くはないから、

水の音しかない。

うし、水やり終了。

そう言えばこっちのトマト、そろそろ収穫だな。
先生に言つて来よう。

うちの学校の温室は割と本格的なものだから、
プチじゃなくてちゃんとしたトマトが育つ。

今年の部費どうしよつかなあ……

何か別な種類の種でも買うかな……

そんな風にボーっとして歩いてると、

何かが飛んできた。

「ヒュツ」

とつさに避ける。

「本……？」

本を投げるって……

どんな奴だよ……

「すみません！当たってませんか？」

「あー、大丈夫」

顔を見ないで返事する。

「ハイ、これ・・・」

顔を見て気づいた。

拍手の子だ。

「君、拍手してくれた子・・・だよな？」

「え？・・・あ、ハイ！」

「あのときはありがとね。俺、拍手されなきゃ降りちゃダメだったんだ」

「いえ、別にそんな・・・」

少し顔を赤くする。

照れるとこか？

「そうそう、本・・・「雑草辞典」・・・？」

「あつ、すみません。気にしないでください・・・」

「・・・君、植物は好き？」

「えっ？・・・嫌いではないですけど・・・」

「「雑草」か・・・「エノコログサ」って何か知ってる？」

「？わかりません・・・」

「実は、猫じゃらしの正式名称なんだって」

「そうなんですか！？私、猫じゃらしは猫じゃらしって名前だと・・・」

「俺もそう思ってたんだけどさ。んで、何が言いたいかって言うと・・・」

今でも俺は、何でこんなこと言っただろうと思う。

でも、言っただけだと思っただけ。

だって、言っただけで実柚と過ごしてるんだし。

園芸的に言うと、毎日が花のよう、みたいな。

例え、その花が何度も枯れかけたとしても・・・

「園芸部に、入部しませんか？」

「・・・」

黙っちゃったよ。

そりゃそうだ。

いきなりこんな事言われてすぐに「OK」出せる奴いたら見てみたい。

「・・・・・・・・・・ハイ」

・・・・・・・・・・

えっ？

「入部します」

ええええええええええええっ！！??

「いつ、いいの？そんな簡単に決めちゃって」

「ハイ。もともと体育は苦手だし。それに・・・・・・・・」

「？それに・・・・・・・・何？」

「いえ、何でもないです」

？まあ、いいや。

「そっか。じゃ、先生に手続きしに行こっか」

「あ、待ってください。入部するには条件が・・・・・・・・」

「？何？」

「私と・・・・・・・・友達になってください」

再び赤面。

・・・・・・・・・・

うん、ココはいいんじゃないかな。

照れても。

これは・・・・・・・・

断る理由はないよな？

友達だし・・・・・・・・

「・・・・・・・・うん。いいよ。「友達」になろう」

「・・・・はい。ありがとうございます！」

自然と笑みがこぼれた。

彼女の嬉しそうな微笑みに。

「友達」っていう関係なんか、保てるはずなかった。
もしかしたら、気付かない方が良かったかもしれない。
彼女に惹かれてる、ってことに。

5・枯れさせはしない

あれから2日……

「優先輩、この花枯れてますよ!？」

「マジか?……ホントだ!」

実柚は部活にも慣れたようで、だいぶ馴染んできた。

「せっかく育てたのに……」

花が咲いたときや実が生ったときに見せる表情は……

「優先輩、この花どうしますか？」

「可愛い」と思えるほど無邪気だった。

「優先輩？」

下から顔を覗きこまれる。

「んっ!？なっ、何？」

「……もういいです。大事な話だったのに……」

「ごめん!考え事してたんだって!」

「部の存続にかかわる話かもしれないのに……」

「マジで!？」

「くすっ!嘘ですよ!」

「あー、良かったー……」

「この花どうしたらいいですか？」

「んー、そうだなあ……」

「私が持ち帰ってもいいですか？」

「ああ、いいよ。じゃあ今植木鉢持ってくるから待ってて」

「あっ!私が自分で……」

「ポンッ」

「?なんですか……?」

「後輩は先輩の言う事を聞いてりゃいいの。大体、女子に行かせるほど非常識じゃねーよ」

「……ハイ」

そう言つて俺は鉢を取りに行つた。

「はーっ！」

一人で叫ぶ。

周りから見たらただの変人だが、そんな事気にしている余裕はない。先刻、実柚の頭をどさまぎに（どさくさにまぎれて）触つてしまつたのだから。

思春期の男子中学生か！俺は！

よし、自然に。自然に……

「ただいま。はい、これ」

「あつ、ありがとうございます！」

……

その笑顔は……

反則では？

実柚の動作は全て天然だ……

しかし！

上目使いや笑顔でお礼は幾らなんでも！

「カシャッ、カシャッ」

後ろから音が聞こえる。

俺が一人でくだらない事を考えている間に実柚は作業を始めた。

「手伝うよ」

「すみません！お願いします」

「カシャッ、カシャッ」

「……………」

……………

気まずい……………

会話がないからシャベルの音しかない。

「優先輩って．．．．．」

「ん？何？」

「優先輩って、女の子の友達はいますか？」

「ん．．．．．男はいるけどなあ」

思い当たらない。

女友達なんかいたっけなあ．．．．．

「わかんない。多分いないかな」

「そうですか．．．．．」

「実柚は？」

「私は．．．．女の子は一人だけ．．．男の子は．．．．．優先輩だけです」

．．．．．

「そっか．．．．．」

友達少ないのか。

だからあの時．．．

「友達になつてください」

なんて事言っただ。

「そっか．．．．．」

なんて言っただいいんだろう。

「ポフッ」

なんて言っただいいかわかんない。

だから、さっきより優しく、静かに頭を撫でた。
心臓はすでに限界を振り切ってます。

「ポロっ．．．．．」

実柚が泣いた。

「実柚？」

「すみません・・・私・・・」

「ギュッ」

「っ！？優先輩？」

実柚を抱きしめた。

そうしないとダメな気がした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・ひつく・・・」

実柚が一通り泣き終えてから俺は言った。

「昨日に続きいきなりのパターン。」

ただし今回は相当の勇氣が必要です。

「実柚、俺と一緒にいてくれないか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

言ってしまいました。

出会って二日・・・

「友達」という枠は、いとも簡単に壊れた。

良い方にか悪い方にか・・・

それはまだ分からないけど。

「・・・・・・・・・・ハイ」

いい加減大袈裟な驚き方も飽きたので・・・

今回は冷静に・・・

「付き合ってください」

「・・・ありがとう」

君と一緒に綺麗な花を咲かせよう。

例え育てた植物が、雑草だったとしても。

それこそエノコログサだっていいさ。

君となら、それであつた事に幸せを感じれるから。

決して枯らさせなんかないよ。

僕が守るから。

6 ・ シミとなる手紙（前書き）

ここから少しずつ花が折れはじめ、枯れはじめます。

優はそれをどうやって防ぐのか・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

何で実柚に会えなくなるか考えなきゃ（あらすじ参照）・・・・

ではでは皆さん、良い夢を。

6・シミとなる手紙

付き合い始めてから早1週間・・・

新しい発見は幾つもあった。

実柚の友達について。

音無が実は実柚の友達を狙っていたこと。

実柚の好み。

俺が嫉妬ばかりしている事。

「優先輩！」

後ろから駆け寄ってくる実柚。

あえて聞こえてないふり。

「優先輩？」

もう少し・・・

「優先輩ったら！」

「ん？何？」

「もう！何度も呼んだんですよ？」

「うん。聞こえてた」

「だったら何で無視したんですか！」

あつちを向いて拗ねる実柚。

「ごめんごめん。だって・・・」

「だって、何ですか？」

相当拗ねてるな・・・

「実柚のその顔を見るたびに可愛いつて思って、また見たいって思
っちゃうんだよ」

「！・・・・・・」

顔を真っ赤にして俯く実柚。

我ながら少しキザだったかな・・・？

「・・・・・・クスッ」

実柚が笑ったのも見逃さない。

「ガッ」

「へっ？」

「今笑った理由は何ですか」

「え．．．えーと．．．その．．」

「「よくそんな歯が浮くようなセリフ言えるな」、か？」

「えっ？何でわかつ．．．あっ！」

「ふゝん．．．当たり前かあ．．」

「！あつ、あの！すみません．．」

語尾が小さくなっていく。

「んゝ．．．可愛いから許す」

実柚はまた照れながら、

「ありがとうございます．．．」

と、小さく呟いた。

さらに1週間。

この日から、花は何度も枯れる危機に襲われる．．．

「．．．．．」

またベタな．．．

何も靴箱に手紙を入れなくなつて．．．

まあ、みんなの前で告われるよりマシだけど．．．

勘違いだったら非常に恥ずかしいのですが．．．

これは世間一般的にいう「ラブレター」では！？

どうしよう．．．

「優先輩？」

「ぎくっ！」

後ろから実柚の声がする。

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない！」

手紙を隠す．．．が、

「手に持つてるの何ですか？」

バレたー！！

「ん？何の事かな？」

「見せてください」

うつ・・・

「これは・・・手紙ですか？」

「うん・・・そうみたいだね」

「誰からですか？」

「わかんない」

「かばわなきゃならない人ですか・・・」

いや違う！

誤解だ！

「・・・ハイ！返します」

「あつ、ああ・・・」

「今日は園芸部なにしますか？」

「ん・・・特にする事もないかな・・・」

「じゃあ、水やりは私がやっておきますから優先輩は先に帰ってて

ください」

「いや、俺が行くよ」

「いいんです。私にいかせてください」

「・・・わかった。帰り気をつけてな」

「はい。さようなら」

実柚がこんな事言い出すなんて珍しい・・・

きつと何か考えがあるんだろう。

俺はこの後後悔する。

君の手を離れた事を。

元に戻ったとしても、折れた後のない花のほぅが綺麗なのに。

7・君といてこそ

「そうだ。手紙……」

まだ手紙を開けていなかったことに気づく。

「ペリッ」

ご丁寧に宛名まで書いてある。

「……これは……」

誰？

全然知らない名前。

とりあえず内容を……

優先輩へ

こんにちは。

1年の相木留美あいきるみです。

名前を言われても誰かは分からないでしょうね。

実は、校内では先輩は実柚ちゃんと一緒にいるので伝えづらいので、手紙で伝えようと思いました。

確かに、優先輩は実柚ちゃんの事が好きでしょう。

見ていればわかります。

でも、それなら尚の事、知らせなければいけません。

実柚ちゃんは、迷っています。

あなたと付き合う事を。

そして、揺らいでいます。

あなたを選ぶか、音無先輩を選ぶか……

詳しくは電話でお伝えします。
もし知りたければ、↑の番号へどうぞ。

は？

揺らいでる？

俺と音無を？

比べてる？

何が何だか分からない。

とりあえず冷静になろう。

そう思い、頭を冷やすべく俺は帰宅した。

「ボスッ！」

ベッドに座る。

つまり、手紙の内容は「実柚は音無に告られて、俺とどっちを選ぶか迷っている」と。

それを俺に言っでどうしろと……

大体音無は実柚の友達狙いじゃ……

そうだ。

コイツが嘘を言ってるに違いない。

そう思えたら楽なのに、手紙の内容がシミとなって心を染めていく。

……俺は。

こんな奴より実柚を信じる。

実柚の言葉を。

実柚の想いを信じる。

こんな奴の手紙に壊されてたまるか。

翌日。

山羊座は厄日なのか？

また手紙が入っている。

俺に恨みがあるのか、実柚に恨みがあるのかは知らないが、
こうなると悪意がある事は決定だな。

今回は隠さないで、実柚に言おう。

「知らない奴から」って。

「優先輩？」

「ん？何？」

自分から言う勇氣はなかった。

だから、隠すつもりは無いが、聞かれたら答えるようにしよう。
そう決めた。

「今日も私が水やりをしますから、先に帰っててください」

「いや、俺も行くよ」

「いいんです！」

実柚に押される。

でも、そんな事より……

実柚の明らかな拒絶の方が驚いた……

「すみません……また……明日……」

そう言つて実柚は俺のそばから去って行った。

俺はと言えば……

立ち尽くしていた。

「何でなんだろうな……」

体の自由が利くようになった頃には、外は静かだった。
どれくらいの時間がたったのだろうか。

まだ、実柚はいるかもしれない。

俺は温室へ向かった。

自分のバカさとかつて、何かあつてから気づくんだ。

でも、「変わろう」って思えば思うほど、俺はどんどん変われなくなっていく。

できればこんな思いしたくないけど、それも仕方ない。

君と一緒に、花を咲かすと決めたのだから。

君といてこそ俺なのだから。

8・有期限の別れ

「スタスタスタスタ」

意識しなくても早歩きになる。

まだ実柚がいるかもしれない。

そう考えると、歩調の事に意識を回してる暇はなかった。

玄関から温室までは遠くはないが、近くもない。

早く行かなきゃ帰ってしまうかもしれない。

温室の中がぼんやりと見える距離まで来た。

人影がある。

確かにあるが……………

二人？

いやな予感がする。

こんな予感ほど当たってしまうけど……………

ドアの前まで行く。

実柚はまだいた。

でも……………

音無もいた。

確かに実柚はいた。

音無の腕の中に。

そこからはよく覚えていない。

見つからないようにとすぐに立ち去ったのだけは覚えている。

気がつけば俺は家の前にいた。

いつからか、雨が降っていた。

傘もささず、俺は家の前に立っていた。
こんな所にいたら風邪をひく。
そう思って家に入った。

「どうしたの！そんなびしょ濡れで！」

言われるとは思ったが、やはり母さんに聞かれた。

「雨が降ってるのに気付かなかった」なんて言えねえよな。

「傘・・・忘れてったんだ」

「もお・・・ちゃんと拭いて着替えなさいよ」

「はいはい」

適当な返事で部屋に入る。

その日は、一睡もしなかった。
できる訳なかった。

目の前であんなシーンを見せられて。
実柚に会って、普通にいられるかが心配だった。
いつそ聞いてみようか。

「昨日、音無と何かあった？」って。

「おはようございます！」

「ああ・・・おはよう」

今日は快晴。

燦々と太陽が降り注いでいる。

晴れだからか、実柚も元気が良かった。

いつも俺の前では静かではなかったが。

「先輩？」

「んっ！あ・・・何？」

「何かあったんですか？」

何かあった？

むしろ俺が聞きたいよ。

「いや、実柚さ．．．」

「？何です？」

「音無と何かあった？」

「え．．．．．」

時間が止まった。

実柚は黙りこくってしまった。

俺は．．．返ってくる答えについて身構えていた。

「何も．．．．．」

何も？

嘘だ。

俺は見た。

音無の腕の中にいる実柚を。

なのに．．．

何も？

「どうして．．．嘘つくんだよ」

「えっ？」

「昨日、温室に行った。

実柚がまだいるかと思って。

そしたら、実柚が音無の腕の中にいた」

俺は自分が見たことを説明した。

実柚．．．俺の見間違いなら言ってくれ．．．！

「そう．．．ですね」

．．．．．

「確かに．．．音無先輩に抱きしめられました」

「何で？」

「それは．．．言えません」

「言えないことなの？」

「・・・はい」

「隠さなきゃいけないことなんだ・・・」

「違います！・・・ただ・・・信じてください」

「何を？」

「えっ？・・・」

「俺に何を信じているの？」

「・・・」

「信じたいけど・・・信じられない」

「そうですか・・・」

「・・・」

「でも！じゃあ優先輩は私に隠してることに無いですか？」

「俺は・・・」

「手紙のことだって！私に説明してくれなかったじゃないですか！」

「それは・・・」

「自分だけが不安だと思わないでください！私だって・・・私
だって不安です！」

「・・・」

「優先輩？」

「・・・わかった。ごめん。一回離れよう」

「え？・・・」

「ごめん。俺のわがままなんだけど、頭を冷やす時間を俺にくれ」

「・・・わかりました。どうせ明後日からゴールデンウィークです」

「そうだな。落ち着いたら・・・また話そう」

「じゃあ、また一週間後に逢いましょう」

「ああ。またな」

「はい」

「枯れさせはしない」なんて言うておいて、
自分で枯らそうとしている。

俺、何やってんだろう。

「またな」は再会の約束。

きつとまた、遠い日にも逢う事があるだろう。

永遠の別れじゃない限り、俺は「またね」と言おう。
必ず帰ってくる証として。

この花のそばにいた証として。

9・ 駆け出した想い（前書き）

はい！こんにちは！

えーと・・・何から言い訳して良いのやら・・・（汗
久しぶりの更新でしたね。

何やら勘がにぶったようで（鈍るほどあったのか？

内容がいまいちグダグダ。

それでも、「自己満足」という大義のために！

創成は書き続けます！はい！

と、言う事なので、読んでいただける方はどうぞ！←

9・駈け出した想い

実柚と離れてから、1週間がたった。

今日でゴールデンウィークも終わりだ。

でも、俺の中では全然考えがまとまらなかった。

音無に問いただしてはみたが……

「あれは俺が勝手にやったんだから、実柚ちゃんを怒らないでやれよ。」

まあ、俺に怒られても嫌だけど。

事情は……実柚ちゃんの口からのほうがいいんじゃないかな？」

確かに。

あいつは2人も手出すほど器用な性分じゃないし、

俺も実柚からちゃんと聞きたかった。

あの日の訳を。

「パカツ………パタン」

もう何度繰り返しただろう。

携帯を開けては閉じ、開けては閉じ。

自分から言っておいてなんだが、1週間も逢えないと流石にこたえた。

なんせ最近はずっと一緒だったし、休みの日は必ず連絡をとった。

女々しいなあ………俺。

あいつのあの笑顔がないだけで、日蔭の花みたくなっている。

……ホントは、離れようって言った時点で後悔してた。

耐えられんのか？俺、って。

でも、怖かったんだ。

実柚に説明できなかった自分の弱さを見られるのが。

いつそもう説明しようか。

電話でも何でもして。

それで実柚とやり直せるなら、カッコ悪くても良い気がした。

「ガバツ！」

ベットに寝転んでいた体を跳び起こし、

サツと身支度をした。

階段を走り降りて玄関から出ようとした時……

「ブー！ブー！」

携帯のバイブが鳴った。

そっぴえばうるさいからバイブにしてたっけ。

「表示 実柚」

実柚からだ！

考えるより先に電話に出た。

「もしもし？」

ドクン。ドクン。

心臓がうるさい。

実柚の言葉を待つだけで、こんなに胸が高鳴るなんて。

どこまで俺に初体験させる気だよ……実柚。

「もしもし……優先輩？」

「実柚……ごめん」

つとめて平静を保った。

そうでもしなきゃ、走りだしそうだった。

「私こそ……ごめんなさい。キチンと説明しないで……」

優先輩に……嫌な思い沢山させた……！」

「実柚……。そんな事ないよ。俺だって……怖くて説明出来なかったんだ。

自分が、こんなに弱いだなんて、今まで気づかなかったよ。

だから、ありがとう実柚。ありがとう」

「ゆっ……先、輩……」

実柚はすでに泣いていた。
ずっと……ずっと。

「おさまった？」

「はい……。すみませんでした……。」

「電話で聞くのもあれだからさ、逢ってこない？」

「はい。どこですか？」

「俺が、実柚のどこまで走ってくよ」

「へっ!？」

「プッ」

電話を切った。

実柚の声が聞けただけでうれしいけど、

今は顔がみたい。

散々泣きじゃくった後の、虹のような笑顔が。
そう思って、駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7808g/>

エノコログサ

2010年10月24日01時58分発行